



博物館に立ち寄っていく。ここで「文禄・慶長の役」と「倭城」についての予備知識を得て、釜山に向けて海路出発する。結局、この予備知識は後々まで役に立つことになる。韓国に渡って先方のガイドさんの説明と照らし合わせて、頭の中を整理できて理解しやすかったからだ。

名護屋城博物館では学芸員の宮武さんによるダイジェスト解説があったが、印象に残ったものとして、覚えている感じであげてみる。

- ・豊臣秀吉公は貿易を通じて海外情勢に通じており、明の国力低下に乗り、大陸での発言権を得る機会とみていた。全国統一の前に“唐入り”を宣言した。
- ・はじめ朝鮮国には“明をとるから道を開ける”と命令。古来、儒教的国家観から明とのつながりが深い朝鮮はこれを拒否。日本側の侵攻が始まった(文禄の役1592～96年)。
- ・休戦講話の後に再び再発した慶長の役(1597～1598年)は期間こそ短い、日本側の狙いが当初の入唐でなく最低でも朝鮮半島を獲ることになったため、戦闘と破壊、殺戮は凄惨なものになった。
- ・名護屋城は主に九州の大名に命じて約5ヶ月で完成した朝鮮侵攻の前進基地であり、日本の威勢を広告する場でもあるため、絢爛豪華な城であった。
- ・名護屋城は織豊時代に築城されて現存する城跡としては、安土城と並んで国内随一の史跡価値をもつ。
- ・朝鮮半島に残された倭城跡は、その石組みからは日本の城の姿もうかがえる。保存状態からいえば価値のある歴史的遺産といえる。

釜山・晋州・泗川の戦跡めぐり。そこは歴史の証人として今も息づいている

文禄の役(朝鮮では壬辰倭乱という)で侵攻した日本軍は約16万人。慶長の役(同じく丁酉再

乱)では約14万人。人口約500万人であった朝鮮国にとっては大軍である。当時、日本は世界中で最も多く鉄砲を保有した国の一つであり、兵器の差は歴然としていた。加えて100年近くの内戦が続いた日本の武将達は戦争に練達している。文禄の役では釜山上陸から僅か20日でソウルまで侵攻した。

釜山に渡って迎えたツアー2日目、私たちは釜山鎮支城(プサン・チンジソン)と晋州の晋州城(チンジュソン)を訪れた。

釜山鎮支城は、朝鮮の城を攻め落としたあと日本軍が倭城を築いたものだが、現在は、釜山の中心街近くの小高い丘・子城台公園の中にある。朝8時、我々ツアーの日本人が倭城を求めて丘を歩いて上がっていく。丘の上には早朝バドミントンを楽しむ主婦のグループなどが汗を流しており平和な公園そのものであった。それでも丘の中腹には累々と石組みが残っていて、小西行長が命じて再整備させたという雰囲気はある。

一方、晋州城は城そのものが史跡公園として整備され、公園内に壬辰倭乱・丁酉再乱に関する資料を展示した国立博物館が設置されている。この城は兵3千5百万人、住民約6万人が立て籠もり、ついには全滅したことで知られる。“倭城”という中世日本の侵略の象徴であり、韓国国内でもこれを貴重な史跡としてどう後世に伝えるべきか話し合っているという。現在、韓国内の倭城跡は公園として再整備されたところが多い。この晋州城は純粋に朝鮮式城として復元され、民族の誇りと歴史を伝える貴重な史跡となっている。今では南江のほとりにたたずむ晋州城の美しい風景を背景に、新婚カップルが仲良く写真を撮る姿もあって、市民の憩いの場にもなっている。

ツアー参加者の中にはどこで手に入れてきたのか、倭城の石垣の見取り図を日本から持ってきた年輩の男性2人連れがいて、見取り図と実物が合

っていることを確認しあっては喜んでいる。聞いてみると怡土城（前原市）の研究家であった。

統営で李舜臣將軍の祠を探訪

晋州城のあと、韓国の南部沿岸の近い鎮海湾に面した港町・統営に向かった。統営には李舜臣將軍を祀った忠烈祠（チュンヨルサ）がある。私がまだ小学生の時、社会科の授業で先生が、中世の朝鮮侵攻のことに時間を割き、自分の亀甲船の木製模型を持参して教室に据え（今にしてみるとスゴイと思う）、熱心に説明された光景を覚えている。そのとき李舜臣將軍という名を聞いて、大変頭脳明晰な優れた軍師で、日本の水軍を叩いた人だということを聞いた。

今ではソウルや釜山を始め、韓国の各地にその像が建てられているが、実は戦前の一時期、日本の軍人の間でも大変尊敬された英雄でもあった。ガイドさんによると「江田島の海軍兵学校の卒業旅行では統営の忠烈祠に参ることが一つの流行のようになっていた」という。明治時代、日本海軍は日本海海戦でロシアの艦隊を破ったが、出撃直前に日本の水雷船隊の司令官が李舜臣將軍の祠に必勝祈願したという話が残っており、それがきっかけではないかという説明がなされた。ツアー同行者の中に当時の江田島を知る方がいないか聞いたが、残念ながらいなかった。

私たちが夕方近くに訪れた統営の忠烈祠は人影もなく静かで、そこには李舜臣肖像画、明の皇帝からの恩賜の八品などが展示されている。私の周りでは「やさしそうなおじさんね」とか「うちのお父さんに似ているわね」などとツアー参加の年輩の女性達がヒソヒソと軽口を交わしている。肖像画に描かれた正装の李將軍はそれほど温和な雰囲気の方だった。

山に登って倭城を見よう。西生浦城跡の探訪

最後に訪れた倭城は、ツアー最終日に探訪した蔚山郊外の西生浦城（ソセンポソン）である。こ



【名護屋城の石垣】

築城には西国の様々な大名が参加した。割った石を積んで構造・美観ともに優れた箇所、大小の石をただ積んだだけの箇所など、石積み技術の上手・下手の差があらわれている。



【釜山鎮支城の石垣】

山城の石組みで小西軍が築いたと言われる。

の城は海岸に近く、高さ200Mの小高い山全体を城内とした作りで、加藤清正が築城したものだ。

我々はここを見るために山登りせねばならない。この日はとびきり早く起こされたのだが、朝9時前から山登りである。60～70代の年輩を中心とする約100名の山登りだから大変である。一同「キツイなあ」「足が重いなあ」と悲鳴を上げながら喜んで登っていく。

登ること30分、山頂に達した。城の本丸の石垣がそのままの姿で残っているのには驚いた。周り

の皆さんも目を丸くしている。精巧に組まれた石は全て他の場所から運び上げたものだという。ここの石組みは熊本城を思わせる武者返しも立派なもので、やはり加藤清正がつくった城という雰囲気をもっていた。山頂に30分ほどたたずんだ後、私たちは城を降りた。

4日間、お年寄りに囲まれて考えた

このツアーでは私はバスの中で重宝された。重い荷物を運んであげたり、写真を撮ってあげたり、配布資料の細かい字を読んであげると大変喜ばれる。お菓子や果物、ビールなどの差し入れも沢山いただいた。期せずしてたくさんのご年輩の方と一緒に過ごしたのだが、ツアー旅行に参加する高齢者を見ていて気づいた点がいくつかあったのでまとめてみた。

行動をともした人は皆「仲間」にしてしまう。旅が終わったあとの住所交換など、後々つながる人ネット情報は旅行会社から提供されても良いように思う。自家製の漬物を送る約束を交わしている人もいた。

知らない人と一緒に過ごすことに順応性がある。山形から一人で参加していた最年長の男性は、あえて知らない人と一緒に旅ばかり選んでいるという。

話をよく聞き、勉強熱心で、行動もスピーディー。着替え、食事、買い物、トイレ、移動ははっきりいって今の若い人よりも迅速かもしれない。

へんな無駄遣いはしない。物欲はあまりないのではないかと。むしろ話とか景色とかを楽しみに来ている。

食欲は旺盛である。高速道路のPAで休憩する度に何か買い食いし、その上3度の食事は皆さん全て食べていた。若い人よりよく食べる。

結構目が肥えている。今時の高齢者は国内外の旅行経験をかなり持っているだろう。行く先々

の料理、ホテル、ガイドなどに対して評価の目は厳しい。

旅行後半にはどうしても体力的にしんどい。腰の痛みやシビレを訴える人も出てきた。私も最終日の山登りでは私も後押しして手伝ったが、そうしたサポートも必要になっていくと思う。テーマに載せて楽しく史跡を見せて回る。これは立派な地域づくりの商品だ

西生浦城を最後に日程は終了したが、山登りを終えて周りの参加者の顔を見ると、一様に満足という感じだった。普通、これだけ大人数だと途中文句も出がちだが、それもなかった。私なりにいくつかその理由を考えてみた。

歴史や史跡などに少々関心のある人であれば、大抵理解できるツアー内容だった。単なる名所めぐりでもなく、歴史マニア向けでもないところが良かった。

テーマ型の旅行の醍醐味があった。ガイドブックになく一人旅でも来ることがない特定の都市や農村に行くことができた。

史跡探訪ツアーにふさわしい現地ガイドの活躍があった。会話しながら理解を助ける教養の蓄積がガイドさんに備わっていた。とくに宋良順さんという方は、戦前、日本の女学校に学んであったとかで、日本人の視点も併せた歴史のスケール感を感じさせる説明をされたように思う。料理・宿泊施設が良かった。一通り韓国に来たという雰囲気は味わえる食事・施設内容があった。

内容の密度の濃さに比べ値段は圧倒的に安かった。

今後、地域の歴史・文化資源をテーマとする旅行商品は国内でももっと増えるかもしれないと思うが、これを実現するには結局、来た人に情報を正確に体系立ててサポートしてあげる人の素養、あるいは史跡や文化自然の保存状態など、地域社会が地域の人や歴史などの資源を大切にしてい

ることが重要に思える。そして始めに名護屋城博物館に寄ったことが、その後のツアーを引き締めているような気がする。

後日、JR九州でこのツアーに企画段階から加わっておられた広澤課長（船舶事業部）にお聞きすると「ことの発端は、秀吉公の子孫と李舜臣將軍の子孫が、名護屋城跡にある茶室で献茶会をもったことをきっかけに、韓国旅行公社の福岡事務所長さんがこの企画をJR九州にもちかけたのが始まりです」という。

やはり、人に来ていただく地域の魅力づくりは、ベースとなる地域間の人々の関わりがものをいうということを改めて実感した次第である。



【晋州城国立博物館の展示品】 木製で矢を連射する車。こうした武器で日本軍に立ち向かっていた。



【西生浦城をめざして】 首にタオル、肌着姿で山登り。この頃までは皆さん元気でした。



【大邸郊外の農村・友鹿里にて沙也可14代・金在徳さん】 朝鮮侵攻に参戦したが朝鮮側に部下を率いて投降した日本の武将（沙也可（さやか））氏の14代目子孫。司馬遼太郎さんの「街道をゆく」にも登場。「日韓交流は今の子ども達の世代に受け継ぐべきだ」と語った。